

## 新刊案内

### #Bach: Werke zweifelhafter Echtheit für Tasteninstrumente

これはバッハの名のもとに出版されたが、真性が疑わしいとされていた鍵盤楽器曲を集めたものです。様々な検証を経て、バッハの真作であることがほぼ確実になっているものがこの巻に集められています。新バッハ全集完結後も偽作の問題は残されていますので、まだ別の巻でも引き続き同様の出版がなされる予定です。

### #Bach, C.P.E.: Vier Motetten, Wq 208

バッハの次男、エマヌエルのドイツ語によるモテット集を買いました。彼は鍵盤楽器奏者として鍵盤作品が圧倒的に多いのですが、やはりその父と同じく教会(居住していたハンブルクの教会)の祝日、主日の礼拝音楽には深くかかわることになります。それゆえかなりの数のドイツ語のモテット、カンタータを残しています。また、25曲にもものぼる受難曲を残しています。鍵盤の名手でもありましたが、彼は歌というものから多くのインスピレーションを受けていた、彼の精神は宗教歌と親密に結びついていたと言われます。彼は18世紀におけるドイツ語声楽曲の歴史においてもっとも情熱的であった一人、と現代の研究者から評されています。

### #Beethoven: Messe in C op 86

ベートーヴェンは有名な「ミサ・ソレムニス」以外にはこのC durのミサしかミサ曲は残していません。そしてこれが最初のミサ曲。ソレムニスのミサはその20年後です。彼のキャリアはオルガニストとして教会に仕えることから出発します。そしてこのミサの作曲依頼にはかなりポジティブな気持ちで臨んだようです。彼は出版社宛にこのような手紙を送っているからです。「私はミサについても私自身についても何もしゃべりたくはない。しかし私は確信している。このミサ曲のテキストを今までの誰もがやらなかったような仕方で処理するだろう」彼は出版のとき、ドイツ語のテキストをつけることを出版社に提案します。作曲に際してはラテン語のミサの言葉をドイツ語に置き換えて、語の持つ意味とそれがあらわす概念を丹念にドイツ語で思考して作曲を進めます。ラテン語を自分のなかに受肉してから作曲したということです。

杉本ゆり記